

実だと思ふ(連続性の端のほうに位置するゆえの差異性や困難性は強いられるとしても)。これが冒頭で「何も残らない」と述べられた意味だろう。

長い書評となった。研究の未来が

●ヤコ・セイツクラ/トム・エーリック・アーンキル

『オープンダイアログ』 『オープンダイアログ』を実践する』

最近精神科治療あるいは精神療法の領域で「オープンダイアログ」が注目されるようになった。その契機となったのは斎藤環氏の手による『オープンダイアログとは何か』(医学書院、二〇一五)の出版にあるが、その後の氏による精力的な啓蒙活動の影響は大きい。

評者も斎藤氏の惚れ込みに感化されてその書を精読し、すぐさまある雑誌(『精神医学』五七巻一二号、一〇四〇頁、二〇一五)に書評を纏めたほどである。評者も斎藤氏と同様、この臨床実践はこれまでの精神科医療に対して新しい風となる予感をもった。

どう切り拓かれていくのか、黒川さんのお仕事のさらなる展開とその上梓を願いながら筆をおきたい。

滝川一廣

(たきかわ・かずひろ/学習院大学文学部心理学科)

しかし、先の書には三つの論文の

翻訳はあるが、あくまで氏の手による熱き思いのこもった紹介が主であったので、その中身自体を冷静に深く検討することは困難であった。しかし、幸いにしてその後まもなく「オープンダイアログ」を中心的に担ってきたセイツクラとアーンキルの手による『オープンダイアログ』が高木俊介氏らの訳で出版された。そのおかげで、その中身を深く検討することができるようになった。面白いことに、高木俊介氏らが『オープンダイアログ』を訳している最中に、斎藤環氏がいち早く先の書を出版したことによって大きな

話題となり、高木俊介氏らはその反響の大きさに戸惑いつつ訳業を終え出版したという。

諸外国の理論や活動がわが国で紹介されて話題となつても、その大半は一時的な流行で終わり、それらが根付くことはほとんどない。その最大の要因は、それらに触れていただく感銘を受けた紹介者自身がこれまでの自らの臨床活動を振り返りながら消化吸収し、自らの活動の延長に位置付け、血肉化し、自らの言葉で、つまりは外来語でなく日常語で紹介するという作業を怠つてきたからではないか。今回の「オープンダイアログ」にその危惧はないのか。その点について高木俊介氏自身も率直に以下のように述べている。

『オープンダイアログ』の翻訳者の立場から、日本におけるオープンダイアログを導入するに当たつて……(中略)……つまり食いの形での安易な導入は一時的なブームに終わってしまう危険性があり、さらに下手にやれば、精神医療の商売道具をひとつ増やすだけで、かえって有害なものになりかねないという懸念を抱くからです。』(『オープンダイアログを実践する』七五頁)。

評者は「オープンダイアログ」そのものについてはまったくの門外漢であるが、その内容には注目すべき内容を孕んでいることは確かだと思ふ。その点を見誤らなければ、今日の精神科医療にとつてコペルニクス的転回となるかもしれない。いくつか評者の注目した点を述べてみよう。

「オープンダイアログ」は「急性期精神病における開かれた対話によるアプローチ」とも呼ばれ、発症初期の精神病を主たる治療対象として、フィンランドの西ラップランド、トルニオ市で行なわれている地域精神保健活動である。

患者、家族からの治療要請があれば二四時間以内に彼らの要望する場所に治療スタッフ(三名程度)が出向き、その場で患者関係者とともに互いが対等の立場から自由に語り合う。最大の特徴はこの緊急対応の姿勢である。時には入院や薬物療法を



日本評論社、2016年
2200円(税別)

補完的に用いることはあっても、基本はあくまで開かれた対話である。必要性があれば毎日のように実施されるという。

このような具体的な方法だけを知ると、わが国の現状からあまりにも遊離した夢物語に聞こえるかもしれないが、セイックラとアーンキルがわが国に招聘して開かれたシンポジウムの内容をいち早く紹介した『オープンダイアログを実践する』を読んでその柱となるものを知ることができれば、身近な問題として考えることができるのではないかと思う。

評者の理解では、「オープンダイアログ」最大の特徴は、症状を中心とした診察とそれに基づく治療を廃し、治療者（複数のスタッフ）は患者およびその家族の話を予断偏見なく聞き取りながら、彼らの思いに照準を合わせて応答することにある。それをセイックラは「感情のやりとり」と述べている。たとえ妄想であろうが幻覚であろうが、それを病的症状として捉えて治療の対象とするのではなく、その症状の背後に蠢いている感情を彼らが自由に表に出せるよう工夫し保証する。

「感情のやり取り」に孕まれた治療上の困難さには、安全保障感とか基本的信頼感が育まれる乳幼児期におけるアタッチメント形成過程での子どもと養育者との関係病理が濃厚に反映している。それは評者に言わせれば「甘え」をめぐる問題である。精神病患者が乳児期に体験した「甘え」のアンビヴァレンスによる極度に強い不安や緊張を、彼らなりに紛らわそうと努め続けてきた対処法が自閉、幻覚、妄想といった精神病理現象にあることを考えると、「感情のやり取り」において彼らのアンビヴァレンスがどのようなかたちで表に現れるのか、それを面接過程でアクチュアルに捕捉することが治療者には求められるはずである。

その際、治療者にもつとめられる資質は「オープンダイアログ」でいうところの「不確実の耐性」にあるのではないか。情動体験は誰にとつてもその意味をすぐには

掴みきれないものである。急性精神病患者のように強い情動不安に圧倒されている人と向き合い、面接を継続していくことは容易ではない。なぜなら治療者も患者の抱える情動不安に晒され、共振し、自らの情動不安を生々しく体験することになるからである。

この時の体験は、治療者ひとりでは耐えられるようなものではないことから、「オープンダイアログ」では複数のスタッフで構成されているのであろう。しかし、複数であれば誰にでもできるといえるほど生易しいものではないことも確かである。治療者にも賦活化された情動不安の多くは、そのルーツを幼少期にもち、親子関係において当時体験したアンビヴァレンスであることが大半だからである。

最近評者は臨床心理士を目指す大学院生に対して幼少期の子どもと母親の交流場面を録画したビデオを供覧して、その母子関係の特徴に関する感想を自由に出し合い対話する試みを行っている。生身の人間を理解しようとするれば、まずは直接触れ合い、そこで何を感じるかを自覚することが臨床家になる上で非常に大切

な資質だと思ふからである。いわゆる感性を磨く教育である。そこで評者は毎回驚くべき体験をしている。母親との関係で強いアンビヴァレンスを抱き不安に圧倒されている子どもの姿をビデオで観察すると学生の少なからずは自身の情動不安が誘発されて動揺を来たし、観察した感想を言葉で語ることさえ困難になることが少なくない。「不確実の耐性」は、クライエントの情動不安が治療者にも共振して生じる自らの情動不安に圧倒されることなく、冷静に内省し、その不安の質を吟味し、言葉でクライエントに映し返すことが求められる。このことは誰にとつても容易なことではない。精神分析の訓練の一環として教育分析や乳児観察があることはそのような理由からなのであろう。そのような臨床家としての態度を求める「オープンダイアログ」を気軽に誰にでもできるものではないことは肝に銘じたいものである。

最後にひとつ。「オープンダイアログ」のもつ精神医療の革新性について評者は高く評価しているがどうしても腑に落ちないのは、「オープンダイアログ」という場におい



日本評論社、2016年
1200円（税別）

て何が起こり、何が治療的に作用し、どのように変化するのか、「オープンダイアログ」のもつとも中核的なところが明確化されていないからである。評者が推測するに、おそらくこの点についてはあまりにも非言語的、情動的要素が強いところにあるからだと思われる。「オープンダイアログ」の参加者はつねに自他の感情の流れを感じ取り、それに対して率直に反応している。ある意味参加者自身にも予期せぬ変化が稀ならず起こっていることが想像される。それゆえその過程の現象自体を取り出して明確に言語化することは容易でない。そのことはとてもよくわかる。しかし、この点を曖昧なままにしておくならば、「オープンダイアログ」の核心部分を捉え損ない、わが国では一時的流行で終わってしまう危惧をどうしても抱かざるをえない。そこでぜひとも行う必要があるのが、治療者の意識体験に即して、何がそこで治療的に作用したのか、関係の質的变化がどのようにして起こったのか、記述的（反省的）エヴィデンスをもとに論じるところである。

セイツクラとアーンキルも従来の

客観的エヴィデンスへの強い批判を述べ、自らの実践での手応えをそれに代わるエヴィデンスを通して主張しようとする努力している。「オープンダイアログ」に秘められた革新性は、「個」から「関係」へのパラダイムシフトを意味するといつてもよい。その点からすれば、従来の精神医学が踏んできた考え方を根本的に変えるほどの潜在的な重みをもっているということはできるのではなからうか。

小林隆児

（こばやし・りゅうじ／西南学院大学大学院臨床心理学）

◎大日向雅美著

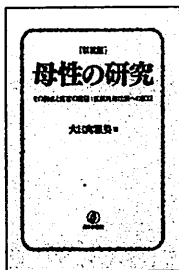
『「新装版」母性の研究』

その形成と変容の過程…伝統的母性観への反証

大日向雅美先生の『「新装版」母性の研究』が、初版から約三〇年の時を経て復刊された。私にとつて思い入れのある本、『母性の研究』の新装版の書評を書く機会をいただいたことをとても光栄に思う。あらためてこの機会を与えてくださったことに深く感謝したい。

私は、この本を熟読した時期が二回ある。最初は一九九〇年前半である。この本には母性意識の世代差研究が含まれており、大日向先生の母校・お茶の水女子大学の卒業生のデータが丹念に分析されている。私自身は、地方に暮らす市井の女性たち、「母性意識の世代差はどのようなになっているのか」に関心を持ち、当時勤務した地域における調査に参加した。最初の熟読はこの頃である。

先生のそれまでの半生をかけた根源的な問いである「母性が本能である」とみなされ、女性なら生まれながらに母性本能を持ち、子供を養育するのは女性であり、子供を可愛く思うのが当たり前である。そんな価値観を強制する社会の中で、「女性のみが育児をすることに疑問を抱き、子供をかわいく思えないと正直に吐露したとたんに責められる社会」に疑問を抱いたことに始まり、その後十年以上の歳月をかけ総合的な母性研究に発展させた本の構成と内容の深さに、圧倒された。博士論文がそのままに著書になるなんて、すごい事である。また「あとがき」に大変感銘を受けた。特にご主人の強い励ましがあつたことが記述されていた。「その彼の期待に応えようとした私（大日向先生のこと）」と、そのような生活のなかから本書



日本評論社、2016年
4200円（税別）